



Title	IOCにおける国歌国旗廃止案の審議過程 (1953 - 1968) - アベリー・ブランデー会長期を中心に -
Author(s)	黒須, 朱莉
Citation	一橋大学スポーツ研究, 31: 39-46
Issue Date	2012-10-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/23282
Right	

4. IOCにおける国歌国旗廃止案の審議過程（1953－1968）

－アベリー・ブランデー会長期を中心に－

黒須 朱莉（社会学研究科 後期博士課程）

はじめに

2012年第30回オリンピック競技大会は、イギリスのロンドンで開催された。ロンドンがオリンピックを初めて開催したのは1908年第4回大会であった。当大会が前回大会と異なったのは、参加の単位が国と地域の国内オリンピック委員会（以下、NOC）になった点にあり¹⁾、NOCのある国家の国旗が登場するのもこの大会からである²⁾。近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタン（Pierre de Coubertin）は、国家間の対立を克服する場として近代オリンピックを位置付けたが³⁾、実際のオリンピックは国際政治の対立構図の中で、常にその理念と政治的中立性を脅かされ続けてきた。

1908年のロンドン大会では、早くも競技においてイギリスとアメリカ代表間で対立抗争が勃発し⁴⁾、入場行進の際にはイギリスとその植民地（オーストラリア、カナダ、南アフリカ）との間で掲げる旗について議論が起こった。1912年第5回ストックホルム大会では、フィンランド人はロシア国旗の下で入場行進をするのかどうか、またオーストリアが、同じ国旗下で、チェコ人とハンガリー人の選手たちも参加することを求めたことにより、オーストリアとハンガリー間で衝突が起こった⁵⁾。表彰式における国旗国歌、開会、閉会式における国旗を掲げた行進などは、国家間の政治的な対立を表面化させてきたのである⁶⁾。

しかし、国際オリンピック委員会（以下、IOC）が、この問題について座して黙ってきたわけではなかった。IOC委員の中には、オリンピック競技大会における国歌の演奏と国旗掲揚といった象徴的なセレモニーの廃止案⁷⁾を提案する者がいた。その代表的人物が1952年から約20年間IOC会

長を務めたアベリー・ブランデー（Avery Brundage、以下、ブランデー）である。彼は会長の任期中にこの種の提案を提起し続けた。

ブランデー会長期における国歌国旗廃止案については、グットマン⁸⁾、川本⁹⁾、守能¹⁰⁾がその内容に論及しているが、それらは特定の時期あるいは提案の一部を扱ったものであり、資料的根拠が不明な記述もみられる。こうした先行研究の状況をふまえて、本稿では、ブランデー会長期における国歌国旗廃止案とそれをめぐる審議の全体像を、主にIOC総会議事録¹¹⁾、IOC理事会と諸国際競技連盟（以下、IFs）と、諸国内オリンピック委員会（以下、NOCs）の会議議事録¹²⁾、IOC理事会議事録¹³⁾によって明らかにすることを目的とする。

1. 国歌廃止案の提起（1953－1957）

ブランデーの会長期、1952年から1972年までに見られる国歌国旗廃止案とそれをめぐる審議についてまとめたのが表1である。ここには正式な提案や審議ではなく、開会式のスピーチや他の議題の中で国歌国旗廃止が議論された場合も含めた。それらを含めると、IFsおよびNOCsとの合同会議で計5回、IOC総会で計8回国歌国旗廃止に関する提案や議論が行われている。

ブランデーがはじめて国歌の廃止を提案したのは、1953年4月15日から16日に開催されたIOC理事会とNOCsとの合同会議においてであった。そこでは「メダル授与時の国歌を特別なオリンピックファンファーレに代替する提案に関する一般討論」¹⁴⁾が行われた。提案者であるブランデーは、「メダル授与時における国歌の演奏を、トランペットによるオリンピックファンファーレに代替

(表1). アベリー・ブランデー会長期におけるIOC関連会議にみられた国歌国旗廃止案の提案内容一覧

年	月日	会議名(場所)	提案及び発言主体名	役職(出身国)	議案及び審議名	提案名(発言内容含む)	セレモニーの種類	国旗・国歌	審議結果
1953	4月15-16日	IOC理事会とNOCs会議 (メキシコシティ)	アベリー・ブランデー (Avery Brundage)	IOC会長 (アメリカ)	メダル授与時の国歌を特別なオリンピックファン ファーレに代替する提案に関する一般討論	国歌をオリンピック賛歌に代替する	表彰式	国歌	満場一致で否決
1953	4月17-18、 20-21日	第48回IOC総会 (メキシコシティ)	アベリー・ブランデー	IOC会長	国歌をオリンピック賛歌に代替する	メダル授与時の国歌を特別なオリンピックファン ファーレに代替する	表彰式	国歌	・ 満場一致で否決 ・ IOC委員Comte de Beaumontの改定案 (演奏時間の短縮)は承認
1955	6月11日	IOC理事会とNOCs、IFs会議 (パリ)	IOC理事会	—	オリンピック競技会の公式セレモニーにおける国 歌	国歌はトランペットのファンファーレによって代替される べきであるという趣旨の提案	表彰式	国歌	・ 満場一致で否決 ・ (次回総会に提案されることとして) 上奏部のみ、もしくは短い部分の演奏、 また演奏時間を制限することが承認される
1955	6月13-17日	第50回IOC総会 (パリ)	Albert Mayer	IOC委員 (スイス)	競技会におけるメダル授与時の国歌をオリンピッ クファンファーレに代替する提案	国歌をオリンピック賛歌に代替する	表彰式	国歌	提案者による取り下げ
1957	6月7-8日	IOC理事会とNOCs (エヴィアン)	J. L. Homan	NOC委員 (オランダ)	—	・ 勝者の国歌の演奏と国旗掲揚を止めること ・ すべての国家の選手らは国家ではなく、 彼らの競技順に行進すべきであること ・ すべての国家の選手らは共通のユニフォーム で行進すること	表彰式、開会式もしくは 閉会式	国旗、国歌	Homanの提案を受けて、ブランデーは、次回総 会で提案することを宣言
1957	9月23-28日	第53回IOC総会 (ノフィア)	IOC理事会	—	新しい規定	国歌の短縮版をトランペットのファンファーレに代替す る提案	表彰式	国歌	却下
1960	(2月13日) 2月15-16日	第56回IOC総会 (サンフランシスコ)	アベリー・ブランデー	IOC会長	(開会スピーチ)	・ 国歌をトランペットのファンファーレに代替すること ・ 開会式ではオリンピック旗が挙げられる際には、 国旗は降るされること	表彰式、開会式	国歌、国旗	—
1961	6月19-21日	第58回IOC総会 (アテネ)	アベリー・ブランデー	IOC会長	国歌	国歌をトランペットのファンファーレに代替する	表彰式	国歌	大多数の票により、否決
1963	2月8日	IOC理事会とIFs会議 (ローザンヌ)	アベリー・ブランデー	IOC会長	—	・ IFsに対して国歌の廃止に関する個人的な意見を 要請 ・ 国旗に関しては現状の維持を支持	表彰式	国歌、国旗	32票中31票で、IFsは廃止案を支持
1963	10月15日	IOC理事会とNOCs会議 (バーデン・バーデン)	アベリー・ブランデー	IOC会長	IOC総会で提案する問題	・ 国歌と国旗の問題を、過剰な愛国心の高揚という 観点から説明	—	国旗、国歌	NOCは反対を表明
1963	10月16-20日	第60回IOC総会 (バーデン・バーデン)	—	—	表彰式における国歌をトランペットのファンファ ーレに代替するための提案	国歌をトランペットの演奏に代替すること	表彰式	国歌	賛成26票、反対26票で、過半数に達しなかつた ため、否決
1965	10月6-9日	第63回IOC総会 (マドリッド)	アベリー・ブランデー	IOC会長	規定の変更と追加	国旗国歌問題の解決に向けたブランデーの提案	開会式、閉会式、表彰式	国旗、国歌	大多数の票により、否決
1968	10月7-11日	第67回IOC総会 (メキシコシティ)	Prince George of Hanover	IOA会長/IOC委員 (ドイツ)	IOA会長による提案	表彰式の国旗国歌の廃止	表彰式	国旗、国歌	賛成34票、反対22票で、過半数を達しなかつた ため、否決

* 総会の回数、提案・発言主体の括弧内の名前は、資料上の表記に則って記している。

する必要がある」とし、「国歌[の演奏]は多くの場合長々としたものだが、他方、トランペットのファンファーレは[演奏の]時間を短縮することができる」と説明した。しかし、協議の結果、この提案は満場一致で否決される¹⁵⁾。

ブランデーは、翌日の4月17日から開催された第48回IOC総会では、ファンファーレではなく、「メダル授与時の国歌を特別なオリンピック賛歌に代替する」¹⁶⁾という提案を行った。この提案は、オリンピック憲章に規定されていた規則58「表彰式」の改正事項にあたるため、改正が承認されるにはIOC総会で委員による3分の2の投票数が必要であった¹⁷⁾。この提案に対して、IOC理事 Prince Axel of Denmark (デンマーク)、IOC委員 Angelo Bolanaki (ギリシャ)、Vladimir Stoytchev (ブルガリア)が反対を表明した。他方、IOC委員 Comte de Beaumont (フランス)は、「短縮された形式でのみ、国歌の演奏を維持すること」に賛成した¹⁸⁾。結局、ブランデーの提案は、ここでも満場一致で否決された。その一方で、Beaumontによる演奏時間の短縮に関する改定案は承認された¹⁹⁾。

川本は、1953年の総会におけるブランデーの提案の背景には、1952年ヘルシンキ大会におけるソ連の参加と多くのメダル数の獲得、そして、戦後のNOCの増加による「ナショナリズムへの高まり」に対する懸念が存在していたと分析している²⁰⁾。こうした指摘は的を射ていると思われるが、1953年の提案および審議内容からは、そのような懸念を読み取ることはできない。

1955年6月11日に開催されたIOC理事会とNOCsおよびIFsとの合同会議において、IOC理事会は、「オリンピック競技大会の公式セレモニーにおける国歌」について審議した。会議では、IOC理事会が、翌週に開催されるIOC総会に向けて、「一続きの国歌を演奏する代わりに、上奏部のみ、もしくは短い部分が演奏されるか、演奏時間を制限する提案を行う」ことが承認された²¹⁾。これは内容から判断して、1953年の総会で承認された改定案に関する具体的な提案であったといえるだろ

う。

しかしその2日後、13日から開催された第50回IOC総会で、この提案が審議された形跡は見当たらない。他方、この総会ではIOC委員 Albert Mayer (スイス)が、「競技大会におけるメダル授与時の国歌をオリンピックファンファーレに代替する提案」²²⁾を行った。この総会でブランデーは、「この提案はIFsとNOCsに提起されたが、両組織は満場一致でこの変更に対する反対の意向を示し……IOC委員の中にも同様に[この提案に対する]強い反発が存在していると感じている」と述べ、Mayerは、「我々は、現状を維持することを支持したIFsとNOCs、両組織間の協力について関心を持っているため、私は自身の提案を取り下げる構えである」と言明し、結局提案を取り下げた²³⁾。

1957年6月7日から8日に開催されたIOC理事会とNOCsの合同会議では、オランダのNOC代表 J. L. Homan が「オリンピック競技大会におけるナショナリズムの高揚に対して、遺憾の意を示し」、次の3つの提案を行った。「勝者の国歌の演奏と国旗掲揚を止めること」、「すべての国家の選手らは、国家ではなく、彼らの競技順に行進すべきであること」、そして「すべての国家の選手らは、共通のユニフォームで行進すること」である。この提案に対し、ブランデーは次回総会で提起することを宣言した²⁴⁾。

同年9月23日から開催された第53回IOC総会では、理事会により提出された「国歌の短縮版をトランペットのファンファーレに代替する提案」は、審議の結果「却下」された²⁵⁾。

以上のように、ブランデー主導による国歌廃止案は、この時期には全面的な反対によって否決され続けた。

2. 国歌廃止案に対するIFsの賛同、IOC総会での支持の広がり (1960-1963)

1960年2月13日の第56回IOC総会の開会スピーチで、ブランデーは国旗国歌について次のように訴えた。「スポーツの偉業において、ある程

度の愛国的な誇りは、おそらく最もなものである。しかし、近頃のあまりにも多くのトラブルは、政治的な侵害によるものである。私は、国旗と国歌を廃止することの適切さを検討するよう、IOCに要請する。表彰式では国歌の代わりにトランペットのファンファーレを用いることが望ましいだろう。また、開会式でオリンピック旗が掲げられる際には、できたらすべての国旗は降ろされるべきであろう。オリンピック競技大会における競技者たちは、一国家の代表としてではなく、一スポーツマンとして、やってくるべきである」²⁶⁾。ブランデーは、このスピーチにおいて、国歌だけでなく、国旗の廃止についてはじめて言及したのである。ブランデーは、「政治的な侵害」によるトラブルの増加と「愛国的な誇り」がもたらす問題について触れているが、それらはどのような事実を指しているのだろうか。

そのひとつが、1956年のメルボルン大会での経験があったと考えられる。それは、ハンガリー動乱とスエズ動乱をめぐる諸国家による競技大会からの引き揚げ、また、「中国台湾チーム」の参加に対する抗議による「中国北京チーム」の引き揚げである²⁷⁾。ブランデーは、これらの経験から、「政治的な侵害」は「愛国的な誇り」によるものであり、それらを助長する国歌と国旗のセレモニーを廃止ないし、制限することを新たに提起したと考えられる。

しかし、翌年の1961年6月19日から開催された第58回IOC総会では、国歌と国旗の両方でなく、国歌のみを廃止するという提案がなされた²⁸⁾。提案者ブランデーは、公式セレモニーにおける国歌をトランペットのファンファーレに代替する案を提示したが、審議の結果、大多数の反対票により否決された²⁹⁾。

1963年2月8日に開催されたIOC理事会とIFsの合同会議で、ブランデーはIFsの代表に対し、国歌に関する個人的な見解を求めた³⁰⁾。この会議では、国際バスケットボール連盟の代表者からの賛同や、国際ボート連盟の代表者による、ボート連盟主催の世界大会で表彰式の国歌を廃止、勝者

はその名が呼ばれることによって讃えられているという、具体的な実施例の紹介がなされた。この提案に対して投票が行われ、32人中31人の代表が国歌廃止案に賛成した³¹⁾。この結果を受けて、ブランデーは「いつかIOC委員からも、この提案に対して支持を得られることを望んでいる」と述べた。また、ブランデーはこの会議で、国歌の演奏は「時に過度に長い時間演奏され、常にレコードによって流される。これは下手な演奏である」と述べる一方で、「国旗[の掲揚]については現状の維持を支持」していることを明らかにした³²⁾。

1960年の総会で表明した国歌国旗廃止案は、ここまで封印されたままだが、その一方で注目すべき変化が見られた。1961年のIFsとの合同会議で、国歌の廃止についてIFs側の圧倒的な支持を得るようになったということ、またIF側に積極的に国歌の廃止を試みる実践が見られるようになったことである。例えば、*Olympic Review*に掲載された国際スケート連盟(以下、ISU)の委員から、1960年1月にIOC事務局長宛に届けられた、IOCの国歌国旗廃止案に対する激励の書簡もその一例である。ISUは、戦後から国際フィギュアスケート大会と欧州世界選手権における表彰式で、国旗と国歌を用いず、代わりにベートーベンの歓喜の歌を演奏し、勝者の国籍には言及せずに彼らの名前のみを読み上げる形式をとっていたのである³³⁾。

1963年10月15日にIOC理事会とNOCsとの合同会議が開催された。この会議では国歌国旗廃止に関する正式な提案や審議は行われていない。しかし、各種の審議においてNOCsから国歌と国旗の問題に対する意見が出された。例えば、ソ連のNOC代表Roman Kiselevは、「スポーツにおける政治的介入」に関する議論の中で、「オリンピック競技大会における国旗と国歌の禁止には反対である」と発言し、「選手たちはどのようにして確認され得るのか？これら選手たちの、彼らの国家を代表するという誇りを奪うことはできない」³⁴⁾と主張した。他方、ブランデーは、「IOC総会で提案する問題」に関する審議において国歌国旗の問題に対し、「IOCはNOCsと同じ視点で国歌

と国旗の問題を見てはいない」と述べ、「過剰な愛国心は良いものではない。そして、オリンピック競技大会は視野の偏狭を助長してはならない」と述べた³⁵⁾。

この会議の翌日、10月16日から、第60回IOC総会が開催され、「国歌をトランペットの演奏に代替すること」が提案された³⁶⁾。この総会では、1963年のIOC理事会とIFsの合同会議で、国歌廃止案が圧倒的多数で承認されたこと、しかしその一方で、NOCsは反対であったことが報告された。NOCsに関する報告は総会前日に開かれたNOCsとの合同会議の結果に関するものと考えてよいであろう。このIOC総会における投票の結果は、賛成26票、反対26票というものであった³⁷⁾。全体の3分の2に達しなかったため、この提案は否決となったが、IOC総会で半数の支持を得るようになったことは、大きな変化である。

3. 国歌国旗廃止案の提起とIOC総会での支持の広がり (1965-1968)

1965年10月6日から開催された第63回IOC総会では、「国旗国歌問題の解決に向けたブランデー会長による提案」³⁸⁾が行われた。彼は、その提案を付属文書内で具体的に次のように示した。「開会式、閉会式におけるパレードの間、諸チームは、彼らの国旗の後ではなく、彼らのNOCのバナーの後に行進することを望む(すべてのバナーはIOCによって承認されたもの)。そのバナーは、国旗ではなく、国旗の色を組み込んだものになるかもしれない。表彰式の間、国旗ではなく、NOCのバナーが用いられ、トランペットのファンファーレが国歌の代わりに用いられるであろう。これは、酷評を受けている過度な愛国主義へと向かう傾向を減少させるだろうが、国家の誇りが失われるわけではなからう。NOCの重要性は高められるであろう」³⁹⁾。

この提案に対して、「国家への愛情というのは高潔な人間の感情であり、容易に理解されるものである」という理由から、IOC委員Stoytchev、

Alexandru Siperco (ルーマニア)、IOC副会長Constantin Andrianov (ソ連)、Herman A. van Karnebeek (オランダ)は反対した。他方、IOC委員Marc Hodler (スイス)は、「多くのIFs、特にスキー連盟は、その経験から素晴らしい成果を残してきた。[その成果とは]それぞれの連盟のバナーと、トランペットのファンファーレに置き換えることによって、国旗と国歌を廃止」したことでであると主張した。しかし、ここでも3分の2の支持は得られず否決された⁴⁰⁾。

ブランデーの主張に明確な変化がみられるようになったのは、この1965年当総会においてであった。ここでブランデーは、国歌国旗の両方の廃止案を明確かつ具体的に提案したのである。こうした変化の背景には、数年に渡りIOCを悩ませてきた東西ドイツの参加問題があったと考えられる。

1956年からIOCは、戦後、分断国家となったドイツ連邦共和国(以下、西ドイツ)の後にNOCを設立したドイツ民主共和国(以下、東ドイツ)のNOCを仮承認することの条件として、東西ドイツの参加形態を中立的な統一チームとし、両国共通の三色旗にオリンピックのシンボルを記した統一旗と、国歌の代わりに歓喜の歌を用いる形式を採用してきた。しかし、1959年の10月に東ドイツが独自の国旗を採用したことにより、東西ドイツの間で統一旗をめぐる衝突が起こることになる。この衝突に対して、IOCは継続して統一旗を用いることを打診し、1964年東京大会まで、IOC提案の統一チームでの形態で参加することを両者に同意させることになった。しかし、1962年の「ベルリンの壁」による東西ドイツ分割の固定化といった情勢を背景にしながら、IOCは、1965年のIOC総会で、東ドイツのNOCを完全なNOCとして認めることになる⁴¹⁾。このとき懸念されたのが、1968年のグルノーブル、メキシコ大会で東ドイツがその国旗と国歌を用いることであった。IOCはこの懸念に対する対応策として、両大会においては「別々のチームとなるが、同じバナーの下に行進し、同じ賛歌と同じエンブレムを使用す

る」ことに対する支持を両者に取り付けることとなった⁴²⁾。

これら 1965 年における決定は、ブランデーによる「国旗国歌問題の解決に向けた」提案がなされたのと同じ総会で行われている。このような東西ドイツをめぐる IOC 側の対応とともに、1965 年におけるブランデーの提案内容の変化を捉える必要があるだろう。

1968 年 10 月 7 日から第 67 回 IOC 総会が開催された。総会において「IOA [国際オリンピックアカデミー] 会長による提案」が審議され、「表彰式の国旗国歌の使用の廃止」が IOA 会長であり、IOC 委員でもある Prince George of Hanover (ドイツ) から提起された⁴³⁾。この IOA 会長の提案に対しては、9 月 10 日に開催された IOC 理事会で、Andrianov から、「この種の提案は幾度も提起されており、多くの票をもって否決されてきた」ことを挙げて、「総会の議案から取り下げるよう」求める意見⁴⁴⁾もあったが、提案は実施された。総会では、IOA 会長が国歌国旗の廃止について、「オリンピックにおける名誉は、選手たちの国家の代表としてということよりも、直接、彼ら個人の資質に対して与えられるべきであるということ」を強調した。また、IOC 委員 Ade Ademola (ナイジェリア) は、「国民感情の必要な高まりは、すでにオリンピック村における国旗掲揚式の時に与えられている。したがって、オリンピック競技大会の期間中は、全体の連帯のためにオリンピック旗のみが在るようにするべきである」と述べた。この提案をめぐって多くの委員による賛否両論の意見が交わされ、投票の結果、賛成 34 票、反対 22 票と賛成がはじめて反対を上回った。しかし、提案自体は賛成が 3 分の 2 に達しなかったため、あと一步のところまで否決される⁴⁵⁾。国歌国旗廃止案は、オリンピック憲章の改正に必要な支持を獲得することはできなかつたのである。

審議内容から、ブランデーが過剰な愛国心や、愛国主義を懸念していたのに対して、反対者は愛国心そのものを擁護する形でセレモニーの継続を訴えていたことがわかる。こうした反対側につい

ては、グットマン、川本、守能が言及しており⁴⁶⁾、東欧諸国の NOCs や IOC 委員に反対論者が多いという点が共通して指摘されている。この点は本稿の分析とも重なるものである。守能は、1968 年総会における提案を「表彰式での国旗の廃止は東ドイツに対する《見えざる差別》であり、西ドイツ政府の顔を立てようとする IOC の陰謀である、というのが、この提案に対するソビエトなどの反対理由であった」⁴⁷⁾としている。しかし、この時期の注目すべき変化は、そのような反対論者を抱えつつも、1965 年には国歌だけでなく国旗をも廃止するという提案が正式になされるようになったこと、また、それに対する賛成の投票数が 1968 年には過半数を上回るまでになったことであり、IOC 内での支持が急速に広がったことである。

おわりに

ブランデーは表彰式における国歌の廃止を 1953 年以降各会議で提案し続け、1960 年からは国旗の廃止についても主張し始める。そして、1965 年からは国歌国旗廃止案を IOC 総会に正式に提案するようになる。こうした提案の根拠として、ブランデーは、過剰な愛国心や愛国主義への懸念を示すようになり、1965 年には、開会式、閉会式、そして表彰式における国旗を NOC 旗に代替する提案を打ち出した。

ブランデーは、自らを「クーベルタンのオリンピックの理想の神髄の守り手である」とみなしており、オリンピックを「商業主義や政治主義」から断固として守り抜く必要があると考えていた⁴⁸⁾。また、オリンピックは「国家間の対抗試合ではなくてあくまで個人の争う大会」であるとし、過剰なナショナリズムをもたらす危険があるとして、チーム競技と国別のランキングに反対した⁴⁹⁾。彼は、オリンピック・ムーブメントの目標の一つは、アマチュアリズムを「現代の世界に充満する物質的風潮」から身を守るための人生哲学とし、「騎士道の精神、競技者に対する尊敬、徹底した

フェアプレーと、すぐれたスポーツマンシップといった精神的価値」に重きを置いていた。その上で、「競技者はもとより、組織する者も役員もオリンピックを自らの利益のために利用してはならないという鉄則」を堅持すること⁵⁰⁾を主張したのである。ブランデーの提案の背景には、まずこのような彼自身のオリンピズム観が存在していたのであり、その上で国家間の対立や、その対立を表面化し、助長する過度で、過剰な愛国心を、国家を象徴する国歌や国旗の廃止といった手段によって抑制しようとしたと捉えることができるだろう⁵¹⁾。

根強い反対論者が IOC 委員の中に存在しながらも、提案に対する IFs の賛同を経て、1965 年と 1968 年の総会においては IOC 委員による賛同も増加し、国歌国旗廃止案に対する支持が広がった。なかでも IFs は、1963 年の IFs との合同会議で、圧倒的な賛成票を持って提案を支持し、また、ISU のように積極的に国旗国歌の廃止と代替措置を講じてきた例や、提案内で紹介されている国際スキー連盟における同様の試みがみられた⁵²⁾。

このような IFs および IOC による国歌国旗廃止案に対する支持の広がりや、同時期に国際体育・スポーツ評議会総会によって草案され、採択された「スポーツ宣言」に代表される、スポーツ界におけるスポーツの価値の明確化とその擁護の取り組みや、関係者の意識の高まりの中で改めて捉えられる必要があるだろう。この点は、未調査であるブランデーの会長退任後の国歌国旗廃止案の検討⁵³⁾と合わせて今後の課題としたい。

【注】

¹⁾ Jean-Loup Chappolet and Brenda Kübler-Mabbott, *The International Olympic Committee and the Olympic System, The governance of world sport*, Routledge, 2008, p. 51.

²⁾ 参加国の国旗を先頭にした入場行進と、表彰式におけるメダルの授与、そして表彰者 3 名の国旗が掲げられる形式は、1906 年の中間オリンピック競技大会ではじめて採用された。Nina K. Pappas, “The Victory Ceremony of the Olympic Games”, IOC, *Olympic Review*, No. 172-173, February-March, 1982, p. 111.

³⁾ クーベルタンは、「一九八六年のオリンピック競技会」と題する記事の中で、平和の対極に戦争をおき、その戦

争は国々が相手を誤解する諸々の偏見によって引き起こされたもので、それは憎悪をうみ、誤解を育む無知、野蛮な道程を経て冷酷無比の争いに至る無知からくるものとした。そうした無知を克服するためには、互いに理解し合い、双方が譲り合うことが必要であり、それらの行為は、若者が周期的に集まって筋肉の強さと鋭敏さを友好的に試すことによって成し遂げられるとした（拙稿「近代オリンピックにおける“エケケイリア”の展開に関する研究—IOC 総会議事録を中心に—」平成 21 年度修士論文、筑波大学、p. 23）。

⁴⁾ Jone E. Findling and Kimberly D. Pelle, *Historical Dictionary of The Modern Olympic Movement*, Green Mood Press, 1996, pp. 36-37.

⁵⁾ Flags incidents through Olympic History, IOC, *Olympic Review*, No. 69, February, 1960, p. 80.

⁶⁾ なぜ国歌国旗が争点になるのかということに関しては権の次の説明が有効であろう。「国家の支配者にとって、『国民国家』という『想像の共同体』を創造するためには、具体的なイメージが不可欠であり、各国間の差異を示すためにも、国家のシンボルが必要」であるということ。そして、「オリンピックの表彰のとき、国旗や国歌が使われるのは、そうした対外的な差異として国家のシンボルが必要だからである。と同時に、国家のシンボルは対内的には国民の統合と管理支配の忠誠の証として使われる」からである。権学俊「スポーツとナショナリズム、その親和性を問う」『現代スポーツ評論 第 23 号』創文企画、2010 年、p. 84.

⁷⁾ 本稿においては、これらを国歌国旗廃止案と呼ぶが、それらは従来の国歌国旗を用いた形式を単に廃止するだけでなく、その代替案をも含んだものである。

⁸⁾ Allen Guttman, *The Games Must Go On: Avery Brundage and the Olympic Movement*, Columbia University Press, 1984, pp. 120-122.

⁹⁾ 川本信正「オリンピックとインターナショナルナショナリズム」影山健編著『スポーツとナショナリズム』、大修館書店、1978 年、pp. 273-275、川本信正『スポーツの現代史』大修館書店、1976 年、pp. 169-170.

¹⁰⁾ 守能信次『国際政治とスポーツ—国際スポーツの政治社会学』ほるぷ出版、1982 年、pp. 85-87.

¹¹⁾ オリンピック研究センター所蔵。IOC 総会は、全 IOC 委員による IOC の最高意思決定機関である。

¹²⁾ 本稿では、<http://www.la84foundation.org> 内の電子データベースに掲載されている IOC の刊行誌 *Olympic Review* における簡易議事録を用いる。本稿で引用する *Olympic Review* はすべて同データベース掲載のものである（2012 年 8 月 22 日閲覧）。

¹³⁾ オリンピック研究センター所蔵。なお、理事会議事録は、総会の審議の俎上に挙がる以前の議論を確認するための資料として扱う。

¹⁴⁾ EXTRACT OF THE MINUTES OF THE CONFERENCE OF THE EXECUTIVE COMMITTEE OF THE I.O.C. with the delegates of the National Olympic Committees, IOC, *Olympic Review*, No. 39-40, June, 1953, pp. 36-42.

¹⁵⁾ Ibid., p. 40.

¹⁶⁾ IOC, *INTERNATIONAL OLYMPIC COMMITTEE 48th SESSION MEXICO CITY April 17, 18, 20, 21, 1953*, 1953, p. 2.

¹⁷⁾ 当時の改定規則に関しては、オリンピック憲章（1949 年版）規定 21「規則の変更」を参照した。

<http://www.olympic.org>

18) IOC (1953-session), *op. cit.*, p. 6.

19) *Ibid.*

20) その根拠として、ブランデーが各国 NOC に対して「オリンピックが国家間の競争でないことに注意の喚起を求める回状を送付していた」ことを挙げている（前掲「オリンピックとインターナショナリズム」、p. 275）。

21) Extract from the minutes of the Conference of the Executive Board of the I.O.C. with the Delegates of the International Federations, IOC, *Olympic Review*, No. 52, November, 1955, p. 39.

22) IOC, *50TH SESSION OF THE I.O.C. PARIS, FRANCE, JUNE 13-17, 1955*, p. 2. この提案は、Mayer がブランデーの意向を汲んで提起したものであった。

Guttman, *op. cit.*, p. 120.

23) IOC (1955-session), *op. cit.*, p. 52.

24) Extract of the Minutes of the Meeting of the Executive Board of the International Olympic Committee with Delegates of the National Olympic Committees and International Federations, IOC, *Olympic Review*, No. 60, November, 1957, p. 65.

25) IOC, *MINUTES of the 53RD SESSION of the INTERNATIONAL OLYMPIC COMMITTEE*, 1957, p. 13. 具体的な短縮案の適用に関しては、川本が、1953 年の総会で、30 秒以内となったことを紹介しているが（前掲「オリンピックとインターナショナリズム」、p. 274）総会議事録上にその記載はなかった。

26) Address by Avery Brundage at the Opening Ceremonies, 56th Session International Olympic Committee - San Francisco, Opera House, February 13, 1960, IOC, *Olympic Review*, No. 70, May, 1960, p. 45.

27) IOC, *MUNUTES OF THE 52nd SESSION OF THE I.O.C. IN MELBOURNE 19-20-21 November and 4 December 1956*, 1956, pp. 3-4.

28) IOC, *MINUTES 58 TH SESSION INTERNATION AT OLYMPIC COMMITTEE ATHENS SENATE HOUSE JUNE 19TH, 20TH AND 21ST 1961*, 1961, p. 3.

29) *Ibid.*, pp. 3-4.

30) Minutes of the Conference of the Executive Board of the International Olympic Committee with the Delegates of the International Federation Lausanne Hôtel de la Paix February 8th 1963, IOC, *Olympic Review*, No. 82, May, 1963, p. 55.

31) *Ibid.* 賛成票数のみの記載であるが、第 60 回 IOC 総会議事録、注 36 上に総票数と賛成票の記述がある。

32) *Ibid.*

33) Flags incidents, IOC, *Olympic Review*, No. 70, May, 1960, p. 56.

34) MINUTES Meeting of the Executive Board of the International Olympic Committee with the representatives of the National Olympic Committees Kurhaus-Baden-Baden Germany October 15th 1963, IOC, *Olympic Review*, No. 85, February, 1964, p. 76.

35) *Ibid.*, p. 80.

36) IOC, *MINUTES of the 60th SESSION INTERNATIONAL OLYMPIC COMMITTEE Baden-Baden Kurhaus from the 16th to the 20th of October 1963*, 1963, p. 8.

37) *Ibid.*

38) IOC, *MINUTES of the 63rd Session of the International Olympic Committee*, 1963, p. 14.

39) *Ibid.*, Annex No. 4.

40) *Ibid.*, p. 14.

41) Otto Schantz, "The presidency of Avery Brundage (1952-1972)", IOC, *International Olympic Committee One Hundred Years, The Idea - The Presidents - The Achievements Vol. II*, 1995, pp. 93-98. 1965 年における決定の後、1968 年の IOC 総会で、IOC は投票の末、東ドイツの NOC を正式に承認した。

42) *Ibid.*, p. 98.

43) IOC, *MINUTES OF THE 67TH SESSION OF THE INTERNATIONAL OLYMPIC COMMITTEE MEXICO CITY 7TH-11TH OCTOBER 1968*, 1968, p. 14.

44) IOC, *MINUTIES OF THE EXECUTIVE BOARD MEETING 30th September 6th October, 1968. Hotel Camino Real, Mexico City*, p. 8.

45) IOC (1968-session), *op. cit.*

46) 川本は 1971 年 1 月の *Olympic Review* に寄稿されたブルガリアオリンピック委員会のニコライ・ゲオルギエフの見解を引用し、彼の国旗国歌存続の理由を「表彰式における旗と国歌に、過剰ナショナリズムを中和もしくは排泄する作用を認めたもの」と指摘している。前掲「オリンピックとインターナショナリズム」、p. 275.

47) 前掲『国際政治とスポーツ—国際スポーツの政治社会学』、p. 85. 守能は、「1969 年に IOC 会長はミュンヘン・オリンピック (1972 年) での国旗と国歌の不使用を提起し、主として東側諸国からの猛反発を招いた」と記しているが、これは 1968 年総会における提案を示したものであると考えられる。

48) IOC (1995), *op. cit.*, p. 83.

49) *Ibid.*, p. 87. ブランデーは、チーム競技に対して、国家間の対抗意識を助長する、「1 億の人口を持つ国の方が、五百万しかいない国より強いチームを作り出すことは明らかである」、そして「観るスポーツとしての魅力を備えているため、興行師にとって金儲けの格好の材料となっている」という 3 つの点から反対した。国別ランキングに関しては、「国家間の対抗試合ではなく、あくまで個人の相争う大会なので、公式の国別得点はない。もともと国別得点の計算自体が不正確なもので実態を正しく伝えていないし、国別の対抗得点にすれば結局オリンピックはアメリカ、ソ連という二大国の争いになってしまう」と述べている。アベリー・ブランデー著／宮川毅訳『近代オリンピックの遺産』、ベースボール・マガジン社、1974 年、p. 33, pp. 43-44.

50) 同上、pp. 44-48.

51) グットマンは、この種の提案を、ブランデーと彼のアマチュアリズムの信奉者たちによって行われた、「ナショナリズムを軽減させることによって、オリンピック精神を保持しようとする」試みとして捉えている。

Guttman, *op. cit.*, p. 120.

52) 守能は、当時オリンピック競技ではなかったが、国旗を巡る問題に対する措置として、国際卓球連盟が 1947 年から同様の試みを実施していたことを紹介している。前掲『国際政治とスポーツ—国際スポーツの政治社会学』、p. 85.

53) 1972 年以降に関しては、川本が後の会長キラニンが国旗国歌廃止の賛同者であったことを挙げている（前掲『スポーツの現代史』、p. 170）。また、ホバーマンは 1980 年のモスクワ大会以降の国旗と国歌の廃止を、Beaumont 委員が提案したことを挙げている（John M. Hoberman, *The Olympic Crisis: Sport, Politics and the Moral Order*, Aristide D. Caratzas, 1986, p. 75）。